年次大会　講演要旨（令和二年十一月十三日）

フランスにおける日本語教育・日本語研究

デロワ中村弥生

本講演では、まず筆者の勤める仏国立東洋言語文化大学（通称イナルコ）の日本学部を中心にフランスにおける日本語教育の現状について簡単に紹介し、次にフランスにおける日本語研究の歴史および現状と可能性について概観した。

イナルコの日本学部には約一〇〇〇名の学生が在籍しており、中国学部・アラビア学部と並んでもっとも大きな学部である。日本語学習者は、本学に限らずフランス全土で八〇年代から安定的に増加傾向にある（注〈1〉参照）。

フランスにおける日本語研究の萌芽期にあたる十九世紀初頭には、キリシタン資料のフランス語翻訳が行われ、これらの翻訳は現在でも日本語研究の貴重な資料となっている。しかしながらこれら草創期の研究は、東洋学の一部としての日本語研究であり、本格的な言語学としての日本語研究が始まるのは一九七〇年以降になる（注〈2〉参照）。

現在、フランスで日本語研究を行う場合、二つの活動の場がある。一つは学際的な日本研究の学会・刊行物、もう一つは一般言語学の学会・刊行物における発表である。どちらで発表するかにより、形式はもちろん内容も適応させる必要がある。また、ある言語で他言語を記述するということは必ずその二つの言語を比較対照するという作業が伴う。その研究姿勢はそれ自体がすでに対照言語学であるといえる。日本語だけを見ていると、他の言語と異なる特徴にも共通点にも気づきにくい。世界の言語の中の日本語という視点は日本語研究においても不可欠といえる。

注

〈1〉詳細については『海外の日本語教育の現状　2018年度日本語教育機関調査より』を参照。

〈2〉一八二五年以降のフランスにおける日本語研究史についてはGarnier Catherine « Two centuries of Japanese linguistics in France: 1825-1995 », Cipango, 2013, No.2. を参照。

（デロワ・なかむら・やよい、仏国立東洋言語文化大学准教授）